

IV シンポジウム

第1回 国内シンポジウム「大谷探検隊をめぐる新研究」

- 報告題目：「大谷探検隊をめぐる新研究」
- 開催日時：2011年9月8（木）13:30～16:00
- 開催場所：龍谷大学大宮学舎北翼2階204教室
- 参加者：75人

【報告者・報告題目】

報告Ⅰ：入澤崇（龍谷大学文学部教授・龍谷ミュージアム副館長）
「大谷探検隊の目指したこと」

報告Ⅱ：三谷真澄（龍谷大学国際文化学部准教授）
「大谷探検隊収集の漢字仏典」

報告Ⅲ：橘堂晃一（龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員）
「大谷探検隊収集のウイグル語仏典」

報告Ⅳ：吉田豊（京都大学大学院文学研究科教授）
「大谷探検隊収集のソグド語文献」

報告Ⅴ：村岡倫（龍谷大学文学部教授）
「大谷探検隊のエルデニ・ゾー寺院調査」

報告Ⅵ：宮治昭（龍谷大学文学部教授・龍谷ミュージアム館長）
「キジル石窟の壁画をめぐって」

【ディスカッション】

ファシリテータ：入澤崇

パネリスト：三谷真澄，橘堂晃一，吉田豊，村岡倫，宮治昭

【報告のポイント】

大谷探検隊が派遣されてより100年以上が経過した現在，彼らが将来した言語・美術資料に基づく仏教研究は，新たな分岐点を迎えている。それは主にデジタル資料の公開や現地へのアクセスが容易になったことによる。日本印度学仏教学学会第62回学術大会のパネル発表において，大谷探検隊将来の仏教資料に対する研究動向と展望が6名の研究者によって報告された。

【報告の概要】

まず入澤崇氏により大谷探検隊の目的と成果について俯瞰された。大谷探検隊と言えば，中央アジア探検に注目されがちであるが，実際にはインド，チベット，東南アジアなど，アジア全域にまたがるものであった。なかでも藤井宣正は，疾患をかかえながらもインド仏跡調査を敢行し，多大な成果を挙げたが，その後マルセイユにおいて客死している。藤井の活動と業績は，再評価されるべきであるとする。最後に大谷探検隊の将来資料に対す

るこれまでの研究の梗概が示され、今後の課題として大谷探検隊に関する総合的な研究の必要性が述べられた。

三谷真澄氏は、旅順博物館所蔵の漢文仏典資料の整理と成果を中心に報告した。故藤枝晃氏、故百濟康義氏らによって策定された写本の年代基準をもとに、旅順博物館資料の一点一点について年代を策定し、トルファン出土の漢文写本が年代判定の基準制定に果たす役割について強調し、あわせて IDP をはじめとする世界中に分散するトルファン資料のデジタルアーカイブ化の重要性を説明した。

橘堂晃一氏は、大谷探検隊将来のウイグル語資料の研究史を概観した上で、近年の研究動向としてデジタル資料と大正新脩大蔵経データベース（C-BETA, SAT など）がウイグル文献研究を促進していることを指摘した。またベルリン・トルファン研究所やその他のウイグル語写本所蔵機関との連携がこれまで以上に重要となってくると述べる。

吉田豊氏は、ソグド語仏典について報告した。ソグド語資料は 8 世紀から 10 世紀に属する。大谷探検隊将来のソグド語資料には、『法王経』や『涅槃経』が知られている。これまでソグド地域出身の僧侶（康僧会など）の存在から、「ソグド仏教」が想定されていたが、ソグド語仏典研究は古い時代にソグド地域に仏教は伝播していなかったことを示す。

村岡倫氏は、橘瑞超と野村栄三郎によるエルデニ・ゾー寺院の調査について報告した。これまで大谷探検隊のモンゴル調査にたいする意識は低く、彼らの調査記録が研究に利用されることはほとんどなかった。野村「蒙古新疆旅行日記」、橘『使命記』のエルデニ・ゾーの碑文の位置を記した図面は、ラドロフの記録と並んで、現在進行中の調査にとっても非常に有益な情報源となる。また彼らが記録したカラコルムの状況は、唐代より歴史的に重要な役割を果たしてきた当地が、20 世紀初頭においてもその重要性を失っていなかったことを示す貴重な資料となる。

宮治昭氏は、大谷探検隊がキジル石窟から将来した壁画資料について報告した。まず熊谷宣夫と上野アキによる大谷探検隊将来のキジル石窟壁画に対する研究史を概観した。さらにヴァルトシュミットや宿白らによるキジル石窟年代論を紹介し、主題研究とも併せて、大谷探検隊将来の壁画の位置づけする必要があることを説く。大谷探検隊将来壁画の研究は、現地のキジル石窟とドイツ隊将来壁画とを合わせ、総合的に研究する必要があると述べた。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター



第2回 国内シンポジウム 「アジア仏教の現在 II」

■報告題目：「アジア仏教の現在 II」

■開催日時：2011年10月22日（土）

■開催場所：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

■参加者：55人

■報告者・報告題目：

李学竹（中国蔵学研究中心宗教研究所副研究員，龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）
「中国仏教の現状について—福建省仏教を中心に—」

林韻柔（台湾東海大学歴史学系兼任助理教授，龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）
「台湾仏教の現状について—五大道場を中心に—」

黄維忠（中国蔵学研究中心『中国蔵学』編集部副編審，龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）
「中国におけるチベット仏教の現状とその特徴について」

■パネルディスカッション：「アジア仏教の現在 II」

ファシリテーター：若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）

パネリスト：李学竹，林韻柔，黄維忠

佐藤智水（龍谷大学文学部特任教授）

木田知生（龍谷大学文学部教授）

三谷真澄（龍谷大学国際文化学部准教授）

【報告のポイント】

各地のアジア仏教の現状と課題を巡る「アジア仏教の現在」と題するシンポジウムの第2回目にあたる今回，李学竹，林韻柔，黄維忠の三氏より，それぞれ，中国の福建省，台湾，中国におけるチベット仏教の現状と課題に関する報告が行われた。その報告をうけて，若原雄昭氏をファシリテーターとして，パネルディスカッションが行われた。

【報告の概要】

李学竹氏は，現在中国の中で最も仏教が盛んで特色があり，「中国僧の産地」とも言われ，日本とも縁が深い福建省の仏教の現状について報告を行った。氏によると，福建省の仏教には，①寺院数が全国の4分の1を占めるほど多い，②僧侶数が漢族地域全体の10%強を占め，僧尼以外に，在家女性信者でありながら寺院で出家同様の生活をする福建省独特の「梵行清信女」という者達がいる，③閩南仏学院や福建省尼僧仏学院など仏教教育機関が多い，④戒律の学習と実践が流行，⑤坐禅修行以外に農作業も行い，農禅一致の伝統を継承，という五つの特徴があるとする。また，氏は，福建省の仏教が盛んとなった理由として，①地理的に中央から遠く，文化大革命による破壊が比較的軽微であったこと，②仏教が民間信仰と融合し，地域に根付いていたこと，③経済発展による人々の富裕化，④

華僑の経済的援助、⑤弘一法師、太虚法師、円瑛法師、虚雲法師などの中国近代仏教を代表する高僧がここで布教活動を行い、その足跡と影響が現在も残っていること、などを挙げた。次いで、氏は福建省の代表的寺院である平興寺と広化寺の活動を紹介した。平興寺は、1991年、仏学院で学んだ界詮法師が寺院に帰り、戒律重視の宗旨を掲げ実践したことで、大いに発展し全国的に有名な戒律道場となったという。一方、広化寺は、「全国三大模範叢林」の一つでもあり、福建省仏学院が置かれ、また、仏教関係の書籍や仏画を復刻・発行し全国に無料で配布する仏教流通処も設けられ、さらには、寺院生活体験サークルである「福慧の旅」などを通じて、仏教の社会への普及活動を積極的に行っているとする。

林韻柔氏は台湾仏教の歴史と現状について報告を行った。まず、台湾仏教史を四時代に区分し、現代台湾仏教は、戒厳令解除(1987年)以後に盛んとなった新興教団を主とすると述べる。とりわけ、仏光山、慈済基金会、法鼓山、中台禪寺、および靈鷲山無生道場の五大道場の影響が大きいという。五大道場の発展は、おしなべてマスメディア・科学技術と文化を布教の手段とし、ある程度、現代台湾の社会構造と観念の変遷を反映しており、このため、現代の台湾社会に対し広範な影響を及ぼしえたと考えられるとする。氏によれば、現代台湾仏教の特色は、印順法師が主張した「人間仏教」の影響が極めて大きく、また、比丘尼僧団が現代仏教の発展に重要な役割を果たしていることである。台湾の仏教界の僧俗は、現代社会に適応するため、政治などに積極的に参加し、教育体制と事業も時と共に進歩し、サンガ教育あるいは社会教育において目覚ましい発展をとげ、多大な成果をあげているとする。

黄維忠氏は、分布範囲が広く、僧の出身地・民族・学歴も多様である中国におけるチベット仏教について、①寺院 ②僧侶 ③信者 ④収入源、という四つの方面から説明した。第一の、寺院については、大寺院・新興寺院は大規模化し、小寺院は没落化傾向にあるという両極化の現象が見られるとし、その原因として、交通の便がよくなり遠方の寺院にも通えるようになったことを挙げる。第二の、僧侶については、男女を問わず若年化の傾向があり、特に若い女性の出家者数が急増しているという。その原因としては、放牧地域のチベット族女性の家庭における地位が非常に低いことが挙げられ、出家すれば定収が得られ、地位も平等で差別を受けず彼女たちにとって出家は良い選択肢の一つであるとする。第三の、信者については、拡大化の傾向にあり、漢族地区、とりわけ沿海地区において発展の勢いを増しているという。内陸においてはあまり信者は多くないが、やはり、高学歴者、そして若年層が中心で、ホワイトカラーや学生がその主体となっており、信仰の目的は現世利益重視であるが、チベット仏教の修行法に惹かれて信仰する者もいるという。第四の、収入源については、布施・読経・仏事活動による収入、そしてその他の収入など三つがあるが、その中で漢族の信徒によるものが三分の一を占めるなど多元化の傾向にあり、それは、一方で、チベット仏教寺院による主体的なチベット仏教伝統文化の保護を促進し、漢民族との異文化間の交流をも促進するものであるとする。

【議論の概要】

若原雄昭氏をファシリテーターとして、報告者とコメンテーター（佐藤智水、木田知生、三谷真澄）を中心に議論が交わされた。

まず佐藤智水氏は、李学竹氏の報告に対して、界詮法師による律の重要性の主張は、社会への問題発信・警告でもあるのではないかとの感想を述べ、居士達はどういう繋がりをもって、仏教に對しいかに支援しようとしているのか、また、律を重視する界詮法師はいかなる律を最も中心に据えているのか、という二点を質問した。これに対し李学竹氏は、中国近代における居士は 1930 年代の上海で始まり、印光法師・圓瑛法師の周りに知識人が集まって支持し、居士林を経営したという。近代における居士の別の起源は、中国の近代仏教を中興した楊文会という居士が支那内学院を創設し、そこで学んだ者をみな居士と言ったというものである。現代では定年退職者が自発的に組織し活動するものが多いと指摘する。律に関しては四分律に依拠し、月に 2 回布薩を行っていると答えた。

次に木田知生氏は、林韻柔氏の報告に対して、五大道場というのは、ここ最近 25 年の間に発展し、今、隆盛を極めている状況であり、そこから新たに吸収できるヒントが多数あったと感想を述べた後、現代台湾仏教の特色である、尼僧が多い状況と、五大道場と電子媒体との関係について質問した。これに対し林韻柔氏は、尼僧が多い原因として、一つは男性が家を継ぐという伝統思想、もう一つは、梵行清信女と斎姑という中国明清時代の南方地域に起源を有する特殊な者の存在を指摘した。電子媒体に関しては、テレビ局を有し、仏教に関する番組を放送しているところもあり、また、法鼓山が仏典や関係資料のデジタル化を推進し学術的に大きな貢献をしていることが指摘された。

最後に三谷真澄氏は、黄維忠氏の報告に対して、チベット仏教といってもニンマ派とサルマ派ではかなり様相を異にすることに注意を喚起し、ニンマ派の寺院が若年層の信者を獲得しているのはどういうことか、僧の資格は社会においてどのように認められているか、ニンマ派の禅宗と密教が融合した教義が漢蔵融合の建築の意匠に関わりがあるのか、という三点について質問した。これに対し黄維忠氏は、信者が多いことと若年化はニンマ派に限らずチベット仏教全体の傾向であり、住職のカリスマ性が信者を惹きつけている、僧尼の資格に関してはニンマ派の僧侶の資格の認定は他派に比べ比較的容易なため僧尼の数が増加している、寺院の様式に関してはチベット仏教の寺院建築様式は当初より様々な要素を採り入れている、と答えた。

この後、フロアーからの質問とそれに対する回答がなされ、その後、若原氏は議論の総括として、第一に、今回の発表は全ていわば中国の周縁に関わるものであったが、中原における中国仏教の現状を今後追究すべきこと、第二に、社会参加、教育・福祉、電子媒体を伴う現代的布教活動といった側面や、各教団相互の連絡が無い点など、日本仏教とも共通する課題があること、第三に、女性の出家は若年層が中心で、女性特有の社会的な困難や差別からの脱出が共通の動機となっているようだが、これは女性学やジェンダー論の観点からも、今後の中国社会の動向を伺う材料としても、重要な課題となり得る、という三点を指摘した。

以上、今回の三氏の報告は、日本仏教とも繋がり深い地域の仏教の現状と抱えている課題を明確にするものであり、議論を通じて当研究センターの今後の活動に指針を得ることができた。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター



第1回 国際シンポジウム

■報告題目：第1回国際シンポジウム

Special International Symposium on Pure Land Buddhism

■開催場所：大谷大学メディアホール

■開催日時：2011年8月4日（木） 16:00～19:00

■参加者：51人

■報告者・報告題目：

Luis O. GOMEZ（ミシガン大学名誉教授）

"On Reading Literature Literally—Concrete Imagery before Doctrine—"

Paul HARRISON（スタンフォード大学）& Christian LUCZANITS（ニューヨーク・ルービン美術館）

"New Light on (and from) the Mohammad Nari Stele"

【ファシリテーター】桂 紹隆（龍谷大学文学部教授・BARCセンター長）

【コメンテーター】デニス・ヒロタ（龍谷大学文学部教授）

荒牧 典俊（京都大学名誉教授）

肥塚 隆（大阪大学名誉教授）

宮治 昭（龍谷大学文学部教授）文書にて参加

【報告のポイント】

阿弥陀仏とその極楽浄土，あるいは多数の仏・菩薩と仏国土に対する信仰は，浄土三部経などの大乘經典に説かれ，紀元2世紀頃のガンダーラをはじめとする各地の仏教美術にも描かれ，大乘仏教の展開を考察する上での重要なテーマである。本国際シンポジウムでは，ルイス・ゴメス氏が浄土のイメージ化について文献学の立場からのアプローチを報告し，ポール・ハリソン氏とクリスチャン・ルクザニッツ氏はガンダーラのモハammad・ナリー出土浮彫を中心に仏国土の表現に関して報告し，議論が行われた。

【報告の概要】

ゴメス氏は，仏国土への誕生を可能にする菩薩の誓願力への信仰として理解されている浄土思想の前提として何があるのか，大乘經典の多くに説かれる多数の仏，菩薩，仏国土の信仰の中核は何か，また何が古代インドの聴衆に仏国土の実在性を信じさせたのかという問題を提示した。この問いに対しゴメス氏は，華嚴経類に着目し，現存する種々のテキストを比較し，最も原型に近いものを推定し，後代に成立した梵本華嚴経における物語性と普賢行願讃における儀礼性に着目した。華嚴経における普賢行願讃は，儀礼のなかで読誦される過程で人々が実際に仏国土や浄土，法界のイメージを形成し，さらに梵本華嚴経におけるスダーナの遍歴の物語は，多仏，多菩薩世界を連想させることに資するところがあつたのではないかと指摘した。そして，この華嚴経の事例は，浄土経類にみられる仏国土のイメージの形成とも密接に関連することを指摘した。

次に、ハリソン氏とルクザニッツ氏は、従来、その主題について研究者間で解釈の分かれるモハマッド・ナリー出土の石板浮彫を中心に、文献学、美術史学の両方の方法論の立場から新たな解釈を提案した。まず、当石板浮彫をはじめとする、仏国土を表現する一群の石板浮彫について、(1)蓮池タイプ、(2)楼閣タイプ、(3)発出タイプの3つに大別し、それぞれの図像的特徴を分析・抽出した。一方、無量寿経・阿弥陀経および阿閼仏国経の漢訳・サンスクリット・チベット本など様々なテキストを再検討すると、当石板浮彫が仏国土の表現であり、とりわけ無量寿経に説かれる浄土のイメージと深い関わりを持つことを指摘した。

【議論の概要】

ヒロタ氏はゴメス氏の報告をまとめ、佛駄跋陀羅訳の華嚴経（60巻本）、梵本華嚴経、普賢行願讃の3つは密接な相互関係を持つという前提を述べた上で、ゴメス氏が華嚴経類のなかでも60巻本が原型に最も近く、他本にみえる増広部分は儀礼等に関わると指摘した点を高く評価した。そして浄土教の実践を研究する上でもゴメス氏が今度提示した視点は有意義であるとした。

ハリソン氏とルクザニッツ氏の考察に対して、荒牧氏は以下のように述べた。文献学と美術史学の相互の視点を用いたことで、初期大乘経典がガンダーラの美術・考古と関連する可能性が明示された点は重要である。そして、当作例について『大阿弥陀経』の記述を中心に阿弥陀浄土との関わりをすでに指摘していた荒牧氏は、蓮台の両脇に坐す菩薩像について、それぞれ観音・勢至菩薩、蓮の男女像とみる自説を紹介した。

続いて、当石板浮彫のような作例に対して、文献と図像がどのように照合するかを検討する研究方法こそ、モハマッド・ナリー石板浮彫およびそれに関連する一連のガンダーラ彫刻の解釈に必要であるとした上で、ここで検討された蓮池タイプの画面は、上部に「弥勒菩薩」、下段に「仏鉢供養」を表現する点等より、大乘的な仏身観に基づくとしても、釈迦仏である可能性が残る、という宮治氏のコメントが紹介された。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

